

西を出發する時から、重なる研究材料として目ざして居たのである、洞は黄土レリスの崖を掘り込めたもので、其内部は今尚ほ七世紀乃至九世紀の繪畫で蔽はれて居るが、永き年月の爲めに随分劇しく損はれてある、先きに茲に來た獨逸人がすでに洞窟の中をもしらべて去つたと聞いたので只これを寫眞する丈けに止めて、野外にある佛寺の（原文七



一圖 千佛洞の外観

字缺）た、數ヶ月間に亙つてしらべた結果、木彫、貨幣、陶器、殊にさきにトゥムシユクでは求むることの出來なんだ文書を得たが永い間外に曝されて居たのであるから、殆んど凝結したものであるかのように見えた、これは土語をブラミー文字で書いたものであるけれども、今日ではその言葉は既に消滅して意味をとるにも餘程困難である、千九百七年の終りに一行はウルムチ（Ouroumtchi）に達したが、クツチャを去つて後の目的地としては、かねて甘肅省の極西敦煌を目ざして居たのである、なぜならば此地にはクツチャのと同じ様な千佛洞があつて、かの回教徒も之を毀損したことがないといふことを、書物や旅行家の言葉で知つて居たからである、敦煌といふのは支那から新疆省に達する大道より別れて僅かに四日路、千佛洞はその南東五里許りの處にある、ざつと五百個許りの簡単な佛洞であつて、二メートルから十五メートル位迄のもの大小とり／＼である、大抵各洞には彩色畫がかいてあるが、少し氣をつけて見ると、これらの繪は決して同じ時代のものでないといふことがわかる、そうして近頃手を入れて修復した極めて拙劣なものゝ外は、十一世紀の